

松嶋館・松島館

伊勢市尾上町(旧、妙見町)にある寿巖院入門寺の参道入口東側(尾上町7-1、現、黄色い3階建てのビル)の場所に「松嶋館(松島館)」はあった、と言われている。



幸田源内大夫 車館大夫 の看板あり

●伊勢国 宇治山田尾上町 参宮ホテル 松嶋館

(但し書き) 弊館は内宮外宮の中央にあり参宮の便利○尤もつとも適正なる旅館にして前日三層楼竣工し是を参宮ホテルと名付け四十有余の客席を増し空気流通眺望尤も宜しく業務に○○なるは勿論待遇も懇親を専らとし諸事御注意を○勉強仕便間○続御投宿あらん事を(あと読めない)

但し、弊館は外宮よりは十(?)、二見朝熊御奉参詣にも近道有之至極都合よし



●會員參宿所

(但し書き右) 弊館は当市の中央にして山田停車場より十丁、外宮より八丁 二見朝熊のご参詣にも至極都合よろしく〇〇

(但し書き左) 弊館は従来より、各道中筋の旅館と氣 ○を通せず独立厳格なる 真相実業の旅館を以て教会 本部より当地幾多の旅館中特に援 選せられ會員參宿所の指定を長年蒙り 居り候に就ては會員諸君は勿論四方花客に対し 貴意に適する様専ら懇切を旨とし自今御定宿と願う熱心にて大勉強仕候間御枉まて車及び程奉希望〇敬白

ご注意 弊館独立を嫉み善悪を申立て己が宿へ誘導する者有〇〇に付〇〇御注意ありたし

尚會員諸君は本部指定の参宿所に御着無之時は本部員御挨拶の為出張の都合も可有之と存ず

且つ弊館は列車発着毎に山田駅停車場へ手代出張為致有之を間同駅御着の筋は直に松島館と御指呼、被下を〇〇〇御案内並に御荷物等万端可然取計可申候

會員參宿所 伊勢山田尾上町 参宮ホテル 松嶋館 山田停車場前三軒目 同支店

●博文館特派員の宿泊せし松島館

館島松しせ泊宿の員派特館文博



博文館はくぶんかんは、東京都の出版社。明治時代には富国強兵の時代風潮に乗り、数々の国粋主義的な雑誌を創刊すると共に、取次会社・印刷所・広告会社・洋紙会社などの関連企業を次々と創業し、日本最大の出版社として隆盛を誇った。

○明治34年発行 神都名家集P. 117「奥野勘三郎（尾上町 松嶋館館主）」よると、

●創業期

1688－1704年元禄年間、奥州松嶋（宮城県松島）の「善兵衛」という人が神宮を参拝に訪れたが、尾上町に逗留して旅館業を営み始め、「松嶋屋」と称した。

（その後、150年ほど時代は経過し）4代目の善兵衛には嗣子^レ（跡継ぎ）が出来ず没した。そのため、寡婦の熊女がその業を継いで家を守っていたが、（明治維新の約10年前の）1857安政4年、肥前島原の藩医「二見政則」が来訪して同店に宿泊したが熊女と夫婦となって（松島屋）善兵衛と改めた。しかし、政則は勤王に強く傾倒し、西郷南洲翁（隆盛）との交流があり、お互いに音信を通じ、尊皇攘夷運動に加担したが幕府に捕縛された。それを逃れて京都に隠れて志士と交わった。その後、再び山田に戻り、姓名を変えて「七林正軒」と称した。王政復古の大業がまさに成んとするや、政則は江戸に遊び、明治維新の後、裁判官となって東京に奉職する。

1874明治7年、松嶋熊女は家（松島屋）を親族に託して夫の政則と共に居ること数年、夫婦相談して、松島屋の名跡を譲渡しようとして親族に相談していた。1880明治13年8月、政則は63歳にして東京で没した。熊女は帰郷して、その家（松島屋）に居る一家は熊女に実母の如く仕え、熊女はその志を切なることと感じ、子がないことを憂えず、1883明治16年76歳で没した。熊女の遺品をみて、南洲翁は、「博覧強通及五車、更於実地果如何、問君禹稷千年後、有否人間有用書」の書を書き政則に贈った。この書幅は同家に保管されている（と記載されている）。

●継承期

小俣村の「奥野勘三郎」は飲食店をやりながら、商業も営んでいた（元二見松嶋館館主 奥野雅則氏によると旅館だったという）。しかし、宮川に架橋するという話を聞くや、小俣村は漸次、衰退に傾いたために、到底、永住する土地ではないと考え、住居を山田に移転しようとした時に、松嶋屋名跡の話があったため、（政則が没した年）1880明治13年に協定を結び、その名跡を継いだ。

勘三郎は1846弘化3年10月、度会郡東外城田村蚊野の乾家に生まれ、奥野家の養子となった。養父（奥の善三郎氏もまた養子として奥野家を継いだ者であったので、善三郎（勘三郎の誤りだと考える）は一旦、実家に復帰して、さらに松島屋の養嗣となり、名前を松島屋善兵衛と改めて、家族で尾上町に移住した。

●何時かは分からないが、奥野勘三郎は師職車館大夫の家名と銘木「端木」を継承した。

同家は元師職車館大夫の家名を継いでいて、その家伝に「端木」がある。

（車館大夫の家名は奥野勘三郎が松島屋の名跡を継いだ1880明治13年以降の継承ではないか？）

「端木」というのは、1776安永5年、下野国梁田郡和泉村の眞秀喜左衛門が感得（感じて会得する）物であった。喜左衛門は常に大神宮を崇敬することは常人を超越していた。1日斧で薪材を採っていたが、その途中、不思議にも両片の木裡（木の中）に大神宮の3文字を印したものを得た。その状態は烙印を押したようだった。一片は裏面に左字ろの一片は表面に右字なり。左字の方を細見すれば木皮にもまた微かに字形があって木心に徹したるものようだった。これをその左字の方を御師車館大夫に寄進した。それ以来、それを同家の神殿に奉祀したが、1805文化2年、幕臣常磐宜風と榛原保人の両人が車館に投宿した時にそれを観覧した。長さ2尺、幅3寸、厚さ2寸の榛木であって、斧の跡が歴々と残っていて、ちっとも人が加工したようには見えなかった。両人はこれを奇妙だと感じ、広く大小名に図って、和歌を募集してその奇端を称賛した。これによって、その名は世に知られ、1831天保2年2月25日、内大臣三條公修（きんおさ三条家28代）公とその子息大納言實萬（実万さねつむ三条家29代、31代実美の父）卿との通達により、仁孝天皇にお見せすることが出来た。その端木に寄せた1巻には、侍従從五位下 藤原朝臣信徳、及び、増上寺住職 権大僧 都恵全を始めとする、当時、著名な名歌数首を集めた。

1835天保6年9月15日に徳川大奥のおみよの方より御台所を経て、将軍家齊公にご覧いただいた。

●アーネスト・サトウの日記より

1872明治5年末にイギリス外交官のアーネスト・サトウが留守政府参議の大隈重信を同行して伊勢に来訪する。彼らの主目的は灯台視察だが、サトウなどが泊まったのが「妙見町の松島屋」だった。

●奥野勘三郎が1882明治15年改築して三層楼を建築。1895明治28年竣工、松嶋館と称した。

奥野勘三郎氏は、すなわち、その家（松島屋）を主宰し、1882明治15年にさらに改築をして、宏壮なる三層楼を建築した。1895明治28年にさらに竣工して、それを「松嶋館」と称した。尾上町の町並みに毅然として雲間にそびえる物、そのものだった。それ以来、倍々に名声を博し、旅客が常に満ちて、近くでも遠くでもその名を知らない者はいないくらいとなった。

（奥野勘三郎の）長男 善三郎氏（養父善三郎との錯誤有り）は1876明治9年12月の生まれで、機制に優れ、業務に勤しみ、父母の家政を助けて、調理も行うような前途有望な青年である。（神都名家集完）

●元、二見松嶋館館主 奥野雅則氏によると、

1897明治30年になって参宮鉄道の宮川～山田(現、伊勢市)間が開通して山田駅前に旅館街が形成されると、松嶋館(松島屋)は1909明治42年まで尾上町で旅館を営んでいたが、1910明治43年に(奥野家)本家が(当時、行楽地・保養地であった)二見浦に松嶋館本店を移転し、分家が伊勢市駅前に松嶋館支店を建設した。その後、さらに二見にも支店を出すが、それが最近まで営業していた松嶋館である。奥野家では一誉坊墓地で、同家の墓とともに松嶋家と「二見政則」の墓も管理している、という。

●1906明治39年の「伊勢参宮案内記」に、尾上町 松嶋館について記述がある。

宏壮な三階造り。この家(松嶋館)は元御師車館大夫の旧家で庭に有名な「端木」がある。ここの支店にもある。(これまでの記述から、松嶋館は元御師車館大夫の名跡をいたものであって、その旧家ではないと考える？ また、「端木」は庭木なのか？それとも庭に置かれなければならない大きな遺物なのか？)

●「いにしへの伊勢」写真集より、

1934昭和9年に宇仁館別館藤屋から失火し、駅前支店松嶋館も被災したと考えられ、これをきっかけに新築したのではないかと？以下3点の写真は何時頃のものなのか？



山田停車場前「松嶋館支店」失火前？



失火後か？昭和10年頃のパンフレットから

●本館に従来より重宝のご神木あり 敬神家諸君の展覧に供す

す供に覽展の君諸家神敬りあ木神御の寶重りよ來從に館本

二見浦
参宮ホテル
松嶋館
電話九番

山田驛前
三層樓
松嶋館
(電話長四二〇九番)

明治44年以降の二見浦の参宮ホテル松嶋館でしょうか？御神木は「端木」だと考える？

●「いにしへの伊勢」同館パンフレット



記載内容の歴史を確認すると、

- 1917大正6年筋向橋駅が山田上り駅と改称
- 1925大正14年朝熊登山電車開通
- 「神都公会堂」は1929昭和4年第58回式年遷宮の時に1928昭和3年建設
- 1930昭和5年伊勢電鉄大神宮前駅建設
- 1931昭和6年参急宇治山田駅建設

文中「伊勢音頭」の項に、今より180年前、寛延(1750寛延3年)の頃、備前屋〜とあるので、今は1930年昭和5年頃に当たる。

従って、このパンフレットは、1931昭和6年以降の出版と考えられるが、各駅がしっかり描かれているので、昭和10年頃の制作ではないかと推測するが？(山田氏談)

●電話帳によると、「松島館」の電話番号は「(特)長29番」契約者名

- 1911明治44～1914大正3年までは松島正太郎
- 1922大正11年～達 清兵衛
- 1927昭和2年～奥野さい
- 1930昭和5年 (奥野)
- 1931昭和6年 奥野 正
- 1935昭和10年 奥野善三郎
- 1950昭和25年 奥野 博



幸田源内墓@天神丘墓地

●尾上町「松嶋館」の錦絵に「幸田源内大夫」と「車館大夫」の看板あった。それぞれ乏しい資料しかないが、明治4年御師廃絶に伴い、松嶋館が各地の伊勢講に進出するため、旧御師配札国の權益を得ようとしたものと思われる。

○幸田源内大夫

幸田家祓名は、幸田(内蔵)大夫(宮後町)、幸田主計大夫(宮後町)、幸田源内大夫(曾禰町)の3家、あるいは、幸田(内蔵)大夫・幸田主計大夫(宮後町)と幸田源内大夫(曾禰町)の2家があり、各家、師職年寄家で正六位でそれぞれ、外宮別宮土宮内人、外宮宮掌大内人兼別宮土宮守見物忌、外宮宮掌大内人兼別宮月詠宮守見物忌を務めていた。幸田源内大夫の配札国は度会郡、相模、三河、遠江、備前、信濃であった。

○車館大夫

車館大夫は、内宮権禰宜、宇治会合年寄家で正六位、車館末真くるとちすえさねの別称に「上総・讃岐・豊前」とあることから、それらを配札国としていたと思われる。

○1879明治12年御師取調帳によると、(幸田幸次郎:明治11年養父光宣通称肥後隠居幸次郎相続)

氏名	通称		住所	家格	職	祓名	配札国
幸田源内 幸田 東 より分家	采女 守見	正六位 平民	曾禰町 66番地	師職 年寄	豊受大神宮宮 掌大内人(兼) 別宮月読宮守 見物忌	幸田源内大夫(1株)	度会郡、相模、三 河、遠江、備前、 信濃 慶長年間
幸田 東	榊原 東、 内蔵	正六位 平民	宮地町 44番地	師職 年寄	豊受大神宮別 宮土宮内人	幸田大夫(1株) 幸田半工門(1株) 中西造酒大夫(銘讓) 三頭文左衛門(銘讓)	三重郡、尾張、近 江、三河、播磨、 ほか多数
幸田 幸次郎	幸田 数	正六位 (平民)	宮後町 44番屋 敷幸田 東同居	師職 年寄	豊受大神宮宮 掌大内人(兼) 別宮土宮守見 物忌	幸田大夫(1株) 幸田主計大夫(1株) 宮井将監(1株)	遠江、駿河、伊 豆、甲斐

○1797寛政9年伊勢路見取絵図には高柳(曾禰町)に「幸田酒造」あり

○伊勢度会人物誌と宇治山田市史によると、

名前	通称	字	号	生・住所	生	没	歳	
光隆	亀吉・内蔵	子棟	西湾	宮後	1725 享保 10	1798 寛政 10	74	和漢学
光孚 光享		公貞	謙堂・停 雲・朴堂		1751 宝暦元	1816 文化 13	66	光隆の養嗣 詩文書法
光瀨	内蔵	子雍	錦城	宮後	1791 寛政 03	1861 万延元	70	光孚の男
正光	春亭	子相		八日市場	1764 明和元	1816 文化13	53	中川弘道二男 土宮玉串内人、正六位 上 詩賦、茶儀
光○	○常へんに昏 要人・源内	伯養	柳所・松 崖	曾祢	1789 寛政元	1849 嘉永2	61	正光の長男 墓屏風山 詩、和歌
光訓	主計	士徳	李溪	宮後	1751 宝暦元	1818 文化15	68	榊原孟以の男、光雄の 養嗣 音楽 笛 詩文 画
光融	主計		雪屋	宮後	1819 文政2	1870 明治3	52	土宮守見物忌 正六位 上 和歌・四条派画
光潤	因幡	生民	双浦	宮後				土宮玉串内人 正六位 上 詩賦 茶儀
光翼	主計			宮後				春庭門人、国学、和歌
光和								詩、名勝詩集
?			柳湾	宮後				書、詩文

(資料)車館大夫

(宇治山市史 P.1401)車館末眞(宇治)没年1869明治2年行年83歳がある

1867慶應3年神宮御師名監 年寄家 車館相模(祓名)車館大夫 正六位

(人物誌)車館末眞 くらまたちすえさね 和田正晨の男、末孝の養嗣

別称 上総・讃岐・豊前、号 堪忍庵・柏寿斎 天明7年宇治にて生、明治2年宇治河原にて83歳没
内宮権禰宜に補し、正六位上に叙した。内宮会合年寄役に任じて権威あり。

茶事を堀内宗完に学び、蹴鞠を飛鳥井家に学びて各其の奥義を究めた。常時、鶴は將軍家の外獵(りよ狩り)する事を得ず、従いて常人の之を飼養するもの殆どなかった。末眞(は、)眞鶴二羽を獲て之を養った。蓋し常時の慣習として如何なる細事も山田奉行の許を得ざれば為す能わず。動もすれば無事の良民の罰せらるることあるを歎き、ゆえに事を構えて之を破らんと企てたのであった。果たして奉行より詰責を受け、即日、之を放つべきよしを命ぜられた。末眞、病と称して秘かに京都に到り、一條家に百方運動の結果、拝領に手続きに仕組み、之を携え帰り、公然飼養場を構え、拝領の顛末を記し市民に縦覧せしめた。奉行も之を奈何ともする能わず、苦笑して止めた。

(人物誌)車館正安 宇治在住 和歌

松嶋館 年表

西暦	和暦	事項
1688～1704	元禄年間	(初代松嶋屋)奥州松嶋(宮城県松島)の人で、善兵衛という人が神宮を参拝に伊勢に来て、尾上町に留まって旅館業を営み始め、松嶋屋と称した。松嶋屋(松嶋館)の屋号は、旅籠を始めた松嶋氏に拠っている
1776	安永5年	(端木)下野国梁田郡和泉村の眞秀喜左衛門が「端木」を感得し、その左字の方を御師車館大夫に寄進し同家の神殿に奉祀した
1805	文化2年	(端木)幕臣常磐宜風と榛原保人の両人が車館に投宿した時に「端木」を観覧した
1831	天保2年	(端木)2月25日内大臣三條公修(きんおさ三条家28代)公とその子息大納言實萬(実万さねつむ三条家29代、31代実美の父)卿との通達により、仁孝天皇にお見せすることが出来、その「端木」に寄せた1巻には、侍従五位下 藤原朝臣信徳、及び、増上寺住職 権大僧 都恵全を始めとする、当時、著名な名歌数首を集めた。
1835	天保6年	(端木)9月15日に徳川大奥のおみよの方より御台所を経て、將軍家齊公に「端木」をご覧いただいた
1846	弘化3年	(奥野松嶋館)奥野勘三郎氏は、度会郡東外城田村蚊野の乾家に生まれ、奥野家の養子となった。養父善三郎氏(先代)もまた養子として奥野家を継いだ者であった。
1857	安政4年	(初代松嶋屋)(創業から150年ほど後、)4代目の善兵衛には嗣子(シシ 跡継ぎ)が出来ずして没した。寡婦の熊女がその業を継いで家を守ったが、肥前島原の藩医「二見政則」が来訪して同店に宿泊したが熊女と夫婦となって善兵衛と改めた。 (二見は松島屋善兵衛となって松島屋を経営していくと思われたが、)政則は勤王に強く傾倒し、西郷南洲翁(隆盛)との交流があり、お互いに音信を通じ、尊皇攘夷運動に加担したが、幕府に捕縛された。それを逃れて京都に隠れて志士と交わった。
1868	明治元年 明治維新	その後、再び山田に戻り、姓名を変えて、七林正軒と称した。 王政復古の大業がまさに成んとするや、政則は江戸に遊び、明治維新の後、裁判官となって、東京に奉職する
1869	明治2年	(車館大夫)宇治山市史 P1401.に、車館末眞(宇治)没 行年83歳
1871	明治4年	御師廃止
1872	明治5年	(松嶋屋)年末に灯台視察を主目的に、留守政府参議 大隈重信にイギリス外交官アーネスト・サトウが同行して伊勢に来た時、妙見町の「松島屋」に宿泊した
1874	明治7年	(初代松嶋屋)その間、松嶋熊女は家(松島屋)を親族に託して、夫の政則と共に居ること数年、夫婦相談して、松嶋屋の名跡を譲渡しようとして親族に相談していた。
1876	明治9年	(奥野松嶋館)奥野勘三郎(長男?)奥野善三郎生まれる。(勘三郎養父善三郎との錯誤有り)機制に優れ、業務に勤しみ、父母の家政を助けて、調理も行うような前途有望な青年である。
1880	明治13年	(初代松嶋屋)二見政則は63歳にして東京で没した。 (奥野松嶋館)小俣村の奥野勘三郎氏は飲食店をやりながら商業(旅籠)も営んでいたけれど、宮川に架橋するという話を聞くや、小俣村は漸次、衰退に傾いたために到底、永住する土地ではないと考え、住居を山田に移転しようとした時に、松嶋屋名跡の話があったので、熊女と協定を結び、奥野勘三郎(善三郎の記述は誤りではないか?)は一旦、実家に復帰して、松嶋屋の養嗣となり、名前を(5代)松嶋屋善兵衛と改め「松島屋」の名跡を継ぎ、家族で尾上町に移住した
1882	明治15年	(奥野松嶋館)奥野勘三郎は「松嶋館」をさらに改築

1883	明治16年	(初代松嶋屋)熊女は帰郷して、その家に居る一家は熊女に、実母の如く仕え、熊女はその志を切なることと感じ、子がないことを憂えず、明治16年76歳で没した。
1895	明治28年	(奥野松嶋館)宏壮なる三層楼が竣工して(尾上町)松嶋館と称した。尾上町の町並みに毅然として雲間にそびえる物、そのものだった。それ以来、倍々に名声を博し、旅客が常に満ちて、近くでも遠くでもその名を知らない者はいないくらいとなった。
1897	明治30年	参宮鉄道の宮川～山田(現、伊勢市)間が開通 山田駅前に旅館街が形成され始める
1906	明治39年	(奥野松嶋館)「伊勢参宮案内記」に、尾上町 松島館について記述が見つけられる。宏壮な三階造り。この家は、元の御師、車館大夫の旧家、庭に有名な「端木」がある。ここの支店も停車場前右側にある
～1909	～明治42年	(奥野松嶋館)松嶋館は尾上町で旅館を営んでいたが、
1910	明治43年	(奥野松嶋館)本家が(当時、行楽地・保養地であった)二見浦に松嶋館本店を移転し、分家が伊勢市駅前に松嶋館支店を建設した。その後、さらに二見にも支店を出す
1911	明治44年	(駅前松嶋館)～1914大正3年まで、山田駅前松嶋館(支店)の電話番号は「長29番」契約者は松島正太郎
1917	大正6年	筋向橋駅が山田上り駅と改称
1922	大正11～	(駅前松嶋館)電話長29番の契約者は達 清兵衛(間違いか?)
1925	大正14年	朝熊登山電車開通
1927	昭和2年～	(駅前松嶋館)電話長29番の契約者は奥野さい
1928	昭和3年	「神都公会堂」建設
1929	昭和4年	第58回式年遷宮
1930	昭和5年	(駅前松嶋館)電話長29番の契約者は(奥野)伊勢電鉄大神宮前駅建設
1931	昭和6年	(駅前松嶋館)電話長29番の契約者は奥野 正 参急宇治山田駅建設
1934	昭和9年	(駅前松嶋館)宇仁館別館藤屋から出火、宇仁館本館も半焼。その間にあった松島館も被災した その後、駅前松島館は建て替えられた
1935	昭和10年	(駅前松嶋館)旅館案内パンフレット制作? (駅前松嶋館)電話長29番の契約者は奥野善三郎
1950	昭和25年	(駅前松嶋館)電話長29番の契約者は奥野 博 戦後も営業を続けていた、と思われるが、廃業は何時なのか?
1955～1964	昭和30年代	高度成長期 修学旅行生で駅前旅館は繁盛していたように記憶しているが?
1964	昭和39年	東京オリンピック
1966	昭和41年	(駅前松嶋館)同年度版ゼンリン地図に掲載なし
2023頃		(二見松嶋館)廃業したように聞いていますが? 二見松嶋館のHP http://futami-ryokan.com/hotel/hotel_09/ は残っている

以上